2016年1月17日中原教会メッセージ

聖書箇所：第二列王記22:1-11

　　　　　　　　　　　　　　**「ヨシヤの改革」**

　本日は第二列王記22章です。23章にはヨシヤ王が行った改革の内容やヨシヤ王の最後について語っていますので、こちらにもふれて、ヨシヤ王の改革とはどういうものであったのかについて学びたい、と思います。先月はヒゼキヤ王の信仰姿勢について学びましたが、ヨシヤ王はヒゼキヤの曾孫であり、ヤーヴェ信仰に立ち帰る大改革を行った王です。クリスチャンの男の子には「義也」という名前がしばしば見られます。南北イスラエル王国において聖書はヨシヤ王を最も高く評価していますので、おそらくそのためクリスチャンの親は「義也」という名前を付けるのが多くなったのだろうと思われます。ヒゼキヤ王からヨシヤ王に到るまでを簡単にご説明いたします。なお、ヨシヤというのは「主は支えてくださる」という意味で、ヨシュア記のヨシュアとは違う名前です。ヨシュアは「主は救い」と言う意味で、イエスと言う名のヘブル語名です。

　ヒゼキヤ王は信仰深い偉大な王でしたが、ユダ王国には偶像礼拝が根深く残っていたため、その子孫の代にバビロニアによって国が滅ぶことがイザヤによって預言されていました。ヒゼキヤの死後その子のマナセがあとを継ぎますが、これが信仰的には劣悪な王でした。列王記記者によれば、マナセはバアルの祭壇を再建し、アシュラに仕え、呪術を使い、幼児を犠牲に捧げた、と言われています。また第二歴代誌33章によれば、天の万象の前にひれ伏した、とされています。自然崇拝です。ユダヤ教における聖書の注解であるミドラッシュによればなんとイザヤを鋸（のこぎり）で挽いて殺した、と言われています。政治的にはアッシリアの属国でした。列王記では、どうしようもない不信仰な王として描かれています。しかし、歴代誌の方ではそうでもありません。治世の終わりの方で彼はアッシリアに反抗し、その結果バビロンに連れて行かれます。アッシリアの首都はニネヴェですがバビロンも大きな町だったと思われます。そこでマナセは悔い改め、「主なる神」の信仰に立ち帰ったようです。第二歴代誌33:12-13をお読みします。「12 しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだって、 13 神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った」としるされています。「その父祖の神の前に大いにへりくだって」という表現は敬虔な信仰的態度を指しております。しかし、17節によれば、「しかし、民は、彼らの神、主にではあったが、高き所でなおいけにえをささげていた」と言われていますので、王さま個人としては悔い改めてヤーヴェ信仰に立ち帰ったとしても国としてはそうなっていませんので、やはりマナセの時代は信仰的には劣悪な時代として記憶されることになります。マナセの時代は45年間であり、ユダ王国の王の中では最長の在位期間でした。信仰は個人のレヴェルでのそれは必ずしも共同体のレヴェルでも同じ、という事にはなりません。特に指導的立場にある人の場合はその共同体を神様に対し、どのような方向に導くかが決定的に重要です。列王記に戻ります。マナセの死後、その子のアモンがあとを継ぎます。彼は22歳で王になりますがわずか2年の王位期間でした。20節によれば「彼は、その父マナセが行ったように、主の目の前に悪を行った」とされています。そして、彼は宮殿で謀反（むほん）によって殺されます。更に24節では「民衆はアモン王に謀反を起こした者をみな打ち殺した」とあります。クーデタにつぐクーデタです。第二歴代誌33:23では「彼はその父マナセがへりくだったようには、主の前にへりくだらず、かえって、彼アモンは罪過を大きくした」と記されており、全く良いとこなし、です。そのあと、ヨシヤが8歳で王となるのです。8歳では自分からこのようなクーデタを起こすはずはありませんから、マナセの部下たちが、アモンに見切りをつけ、ヨシヤを担ぎ出しクーデタに及んだものと推測されます。政治的にはアッシリアが衰退し新バビロニアが強力になりつつあった時代ですから、アッシリアとバビロニアのどちらに付くか、という争いあったことが充分考えられます。もちろん、これに、宗教政策が密接に結びついていたでしょう。アッシリア派はバアル信仰、バビロニア派がヤーヴェ信仰という図式が成立するかもしれません。いずれにしろ、ヨシヤ王は15,16歳のとき、聖なる高台、聖なる異教の柱、バアルの祭壇などを排除し始めます。そして、即位紀元第18年、ヨシヤ王が26歳の頃、「律法の書」の再発見という重大事件があり、その後、「主なる神」への信仰をユダヤ全土に徹底させるヨシヤ改革が開始されるのです。「律法の書」が見つかった経緯は第二列王記22:3-13に記されています。まず王は書記シャファンに言います。「大祭司ヒルキヤのもとに上って行き、主の宮に納められた金、すなわち、入口を守る者たちが民から集めたものを彼に計算させ、 5 それを主の宮で工事している監督者たちの手に渡しなさい。それを主の宮で工事している者たちに渡し、宮の破損の修理をさせなさい。 6 木工、建築師、石工に渡し、また宮の修理のための木材や切り石を買わせなさい。7 ただし、彼らの手に渡した金を彼らといっしょに勘定してはならない。彼らは忠実に働いているからである。」 とあります。書記シャファンと大祭司ヒルキヤというこの二人がKeyPersonになっています。おそらく、ヨシヤ王の側近としてその政策決定に深くかかわっていた二人と思われます。この直前の2節に「彼は主の目にかなうことを行って、先祖ダビデのすべての道に歩み、右にも左にもそれなかった」とありますが、この表現は宗教政策が正しい場合の表現です。10:30には北イスラエルにおいてエフー改革と称せられる宗教改革を行ったエフーについて「主はエフーに仰せられた。「あなたは私の見る目にかなったことを良くやり遂げ」た」と言われています。またユダ王国での敬虔なる王として有名なヒゼキヤについて「彼はすべて父祖ダビデが行ったとおりに、主の目にかなうことを行った」と言っています。ヨシヤ王についてはこれに加え、「右にも左にもそれなかった」とあります。この「右にも左にも」という表現は旧約聖書で14回でてきますが信仰がまっすぐ「主なる神」に向かっていることをさします。イスラエルにおいて宗教改革を行った、エフー、ヒゼキヤ、ヨシヤの3人の王の内でも、ヨシヤについてはその主の前にあっての正しさが最も強調されている、と言って良いでしょう。7節に少々奇異な表現が出てきます。新共同訳では「但し、彼らは忠実に仕事をしているから、彼らに渡した金（かね）の監査は必要ではない」と訳されています。少々意訳になりますが意味はこの通りです。即ち、職人たちを信用して、実際にいくらかかったか、というようなチェックをやる必要はない、ということです。差額がでたならばそれは職人さんたちが自分たちへのTipにして良い、ということになります。これらの職人たちはプライドを持って居た人たちでしょうから、全面的に信用するに値する人たちである、ということを言っています。“まず相手を信用する”ということを出発点にすることは重要です。最初から疑っていると、信頼関係は成立しません。我々の世界でも同じです。

また注意すべき点があります。ヒルキヤが「大祭司」と呼ばれていることです。「大祭司」という言葉は直訳しますと“大いなる祭司”ということであり、そもそもは具体的な祭司個人を指していたのではなく、祭司のなかのリーダー的存在という程度の意味であったと思われます。この第二列王記に初めて大祭司ヒルキヤという祭司が登場します。その後ネヘミヤ記に大祭司エルヤシブ、ハガイ書に大祭司ヨシュアという人物が出てきます。新約聖書の時代に入る前に、ユダヤが独立国になった時期があります。ハスモン王朝と言われています。そこでは王が大祭司を兼ねており、文字通り政治と宗教が一つになっています。このように見ていくと、大祭司というのは、最初は祭司の中でリーダー的な人物という程度の意味であったのが、ヨシヤ王の時代頃から、はっきりとした宗教指導者の最高地位を示すものとなっていった、と推測されます。ハスモン王朝の下でユダヤ国家とユダヤ教の基本が出来上がりますが、そこでは大祭司は宗教的指導者のみならず政治的権力者にもなっていくのです。新約聖書における大祭司はユダヤ社会における宗教的かつ政治的指導者でもあります。ヨシヤ王による宗教改革は当然政治的改革を伴って居り、後のユダヤ社会の骨格を作った、とも言えると思います。逆に言えば、ヒゼキヤ王の時のようにヤーヴェに対する信頼の回復という信仰の本来的内容より政治的統治の手段としての宗教政策に重点があったと言えるでしょう。後程みるように、ヨシヤの宗教改革はユダヤ社会の制度としてのヤーヴェ宗教を確立したものと言えます。キリスト教が抑圧されている人々の宗教からローマの国教になって以降、敬虔なる信仰心ということより、社会制度としての宗教になって行った歴史が思い起こされます。日本の仏教についても同様のことが言えます。宗教に内在する危険です。ルターに始まる宗教改革は制度としての宗教になってしまったキリスト教に対するプロテスト、抗議の意味をもっています。信仰は常に聖霊によって新しくされていないと、制度としての宗教になってしまう危険を孕んでいるのです。その意味で、祭司は神の下に平等であった伝統的なイスラエル信仰が、制度化され大祭司という階級を生んでいったのがヨシヤ改革であった、と言えます。信仰と宗教というむずかしい、問題です。

8節から「律法の書」の発見の物語があります。ここで発見された律法の書とはどのような内容のものであったのかについては諸説があります。申命記の中心的な部分で原申命記とでも言うべきものと言う説、創出レビ民の4書の律法的な部分だったのではないかという説、P資料と称する4書に点在する祭司資料という説などです。23章にあるヨシヤ改革の内容にてらし、逆に再発見された律法の書の内容を推測している訳です。23章にあげられているヨシヤ改革のまず第一は神殿内から偶像とそれに関連する器物を完全に取り払い、それらに仕える祭司や自然を使い占う者を取り除いた、とされています。神殿浄化です。アシュラ像をギデロン川で焼いて灰を共同墓地に撒き散らした、と言っています。ギデロンというのはエルサレムの東にある渓谷のことで言葉の意味は「濁った」とか「暗黒」という意味です。そこには庶民の共同墓地があったようです。名のある人物は個別の墓が用意されるはずですので、アシュラ神が、一般の庶民が死んだ時と同様に扱われ、また灰が撒き散らされるという跡形もない状態にされた、ということです。少なくとも、エルサレム神殿についてはアシュラ神やバアル神の形跡は完全になくされたという事になります。しかし注意しなければならないのはエルサレム以外については何も書かれていない、ということです。アシュラ神やバアル神は豊饒神であり農業の繁栄の守り神ですから地場信仰になり、根深く存在したはずですのでヨシヤ改革で消えてなくなる、という単純なものではない、ということです。

第二に8節にあるように祭司集団をエルサレムに集中しました。そして地方祭司が使用していた祭壇をこわし、ヨシュアの門の入り口に捨てた、と言っています。連れてきた祭司はゲバからベエル・シェバまでと言いますからユダヤ全土から、になります。祭壇を壊したものはヨシュアの門の入り口に捨てたというのですから、実際にはとてもユダヤ全土の話ではありません。ヨシュアの門というのはヨシュアという総督か将軍の家の近くの門と解釈されています。どうも徹底していたとは思えません。ヨシヤ改革に拘わらず、地方祭司がかなり残ったと予想されます。彼等はのちの対シリア独立戦争の時の指導的存在となって行きます。但し、異教の神々の祭司については容赦ない弾圧がされたようです。「それから、彼は、そこにいた高き所の祭司たちをみな、祭壇の上でほふり、その祭壇の上で人間の骨を焼いた。こうして、彼はエルサレムに帰った」と記されています。その祭司たちをその祭壇の上で焼き殺した、とあります。

第三のヨシヤ改革の内容は祭壇の集中です。特にソロモン王の時には黙認されていた異邦人の神々への礼拝場所です。フェニキアの方のシドン人、死海東側のモアブ人、ヨルダン川の東側のアモン人の神々の祭壇です。それらの中で、15節にベテルにある祭壇も打ち壊されたと言われています。この祭壇はヤーヴェ信仰を金の子牛にしたもので十戒で禁じられている偶像です。異教の神々および偶像崇拝の祭壇はことごとく打ち砕いた、と言われています。従って、ヤーヴェ信仰のみがユダヤにおける唯一の公認宗教であり、ヤーヴェ信仰が国教化した訳です。このことはヤーヴェ信仰が制度となったことを意味します。ユダヤ国家として律法を遵守する、ことが国家安泰の条件である、という制度化されたユダヤ教が生まれる契機となっています。日本でも聖武天皇の時代に護国仏教が盛んになりましたが類似したことであろう、と思われます。

第四の改革として過越し祭のことは無視できません。ユダヤ暦の一月の14日の夕方から始まる一週間の祭りです。太陽暦では3-4月です。種入れぬパンの祭りとも言われます。この祭りはペサハと呼ばれユダヤ三大祭の一つです。現在でもパン種の入ったものは一切禁止で、発酵したケーキ類もビールもダメということです。完全徹底されたわけではないとはいえ、公式には祭壇、祭司のエルサレム集中がなされていましたから、地方での過越しの祭りは各家庭で家長がリードする現在のやり方が一般化していったのではないかと推測されます。もちろんエルサレム神殿でだけは祭司たちが集まり祭りの儀式を行ったはずです。

以上の事から見ると、ヨシヤ改革というのは国の制度としてのユダヤ教を確立した最初の改革、と言えます。「主なる神」ヤーヴェに全面的に信頼をおいて政治・軍事的行動を決定し、神様に対する従順の証として律法遵守をする、という信仰的態度とは距離がある、と言わざるをえません。ヨシヤの時代後期はエレミヤの活躍した時期になりますが、ヨシヤ王の記録にはエレミヤに謙虚に主の御心を尋ねる、という態度は伺われません。ユダヤ王国の結束のためヤーヴェ信仰が利用された、と言う側面も無視できません。ヨシヤ改革を手放しで讃えることはできません。

22章14節に戻ります。律法の書を見つけた祭司ヒルキヤ達は女預言者フルダの元に行きこのことを伝えますと、共に喜ぶ言葉かと思いきや、なんと「主はこう仰せられる。見よ。わたしは、この場所とその住民のうえに災いをもたらす」というのろいの預言をします。律法の書がのろいを呼び込んだ、といわんばかりです。しかし、ヨシヤは「心を痛め、主の前にへりくだり、自分の衣を裂き、わたしの前で泣いたので」、願いを聞き入れ、ヨシヤ自身は「安らかに自分の墓に集められる」と言われます。いわば裁きの遅延、遅らせるということです。ヨシヤの敬虔な態度に免じて、彼自分が王の時代には安泰だがその子孫の時代にて神の怒りの裁きを受けるのは避けられない、と言っています。ヒゼキヤの激しい祈りと涙を見て主なる神は彼に15年の命を加え、裁きの時を子孫の代に遅らせたことが思い起こされます。ここに女預言者フルダという人物がでてきます。旧約聖書に名前が出てくる女預言者は他にも居ます。モーセが海を分けた時タンバリンを手に取って踊ったアロンの姉ミリヤム、士師記に出てくる豪傑女性として有名な女預言者デボラ、バビロンより帰還し神殿再興をしようとしていたネヘミヤを脅迫し妨害した女預言者ノアデヤです。これら女預言者の内、本来の神の言葉を預かって告げる、という意味での預言者はここ列王記にでてくるフルダだけです。イザヤやエレミヤのような偉大な預言者と同様、女性が神の言葉を預かる者という意味で預言者と呼ばれていることは驚きです。巫女や呪術家として女性が出てくるのは珍しくありませんが旧約聖書で決定的に重要な預言者として女性が登場する、という点は当時の世界を念頭に置けば驚きのことです。新約でもそうですが聖書は当時の状況においては驚くべき程女性の存在感を明確に示しています。この事から、私は、パウロのことを女性差別者のように言う人には同意できません。とにもかくにも、その女預言者はいわばユダヤ王国の滅びを預言した、と言って良いでしょう。

これで23：25以下を見てみましょう。ヨシヤは律法に従い主に立ち返ったとされているにも拘らず、26節で「マナセが主の怒りを引き起こしたあのいらだたしい行いのために、主はユダに向けて燃やされた激しい怒りを静めようとはされなかった」とされマナセ王の悪行が続いている、と言われています。これは、国家政策としてはヤーヴェ信仰に立ち帰ったがユダヤ社会全体としてみると、特に一般庶民の日常生活においてはいまだ根強く異教の神々や地場宗教、自然崇拝等の宗教生活が根強く残っていた、という意味であろう、と思われます。27節では主の言葉としてユダの滅亡とエルサレムの滅亡が語られます。この言葉が現実のものとなったのは、ヨシヤ王の十数年後です。最後にヨシヤ王はどのように死んだかが書かれています。29-30節には「エジプトの王パロ・ネコが、アッシリヤの王のもとに行こうとユーフラテス川のほうに上って来た。そこで、ヨシヤ王は彼を迎え撃ちに行ったが、パロ・ネコは彼を見つけてメギドで殺した。 30 ヨシヤの家来たちは、彼の死体を戦車にのせ、メギドからエルサレムに運んで来て、彼の墓に葬った」とあります。エジプト王朝は久しく静かでしたが26王朝ネコII世になり勢力を回復し、新興国バビロニアにやられそうなアッシリアを助ける名目で北にむかいます。その途上サマリアの地のメギドでヨシヤ王のユダヤ軍と戦争になり、その時ヨシヤ王は戦死します。しかし、女預言者フルダの預言通り、エルサレムの墓に静かに葬られます。ヨシヤ王はなぜネコ王をやり過ごさなかったのかは謎です。ヨシヤ王はどちらかというとバビロニア派ですが、その後、子孫が反バビロニアになったため、バビロニアから徹底的にやられる、という結果になります。

　ヨシヤ王の最後やそれ以前のユダヤ、イスラエルの王達のこと、更に2つの王国の最後などを考えると複雑な心境になります。“神の掟を守りなさい、そうすれば神の恵みを受けることができる。それを守らなかったので神の怒りを買い、両王国は滅亡する“というイスラエル史の見方を申命記史観と言っています。ある種の勧善懲悪思想であり、因果連関と言われています。このような見方があることは事実です。列王記はこの考え方で出来上がっています。しかし事態はこのように単純ではありません。律法をちゃんと守っていても苦難をうけるヨブのような人間も居ます。神より与えられる不条理というテーマは旧約聖書の随所にでてきます。異邦人の王を主なる神の手足とみる見方や、苦難を神からの試みと解釈する態度もこの不条理に関する一種の説明と見ることも出来ます。そもそも、あのイスラエル民族を選んだ神様の意図が不可解です。苦難を運命づけられた民を、選び主の民とされたともいえるのです。イスラエルの民は人類の罪のための生贄となるべく選ばれた、というのが人類の歴史の現実に最も符合した説明なのかもしれません。ユダヤ教の中には自らを罪の生贄とみる考え方もあります。ホロコーストを神の定めとして受け入れるのです。信じられない宗教です。私たちは新しきイスラエルとして自分たちをどのように見るのでしょうか。簡単に答えられる質問ではありません。祈ります。

（天にまします主なる神様、今日、ヨシヤの宗教改革から学ぶ機会を与えられてありがとうございます。ユダ王国が難しい時期にあって、敢然と「主なる神」への信仰を掲げた勇気に驚くものです。しかし、制度化された宗教は霊に依る覚醒なしでは再度堕落の道に向かうことも見て取ることができます。先の戦争への悔い改めにより再出発したはずの日本が戦前に戻るような動きになっています。主により与えられた使命に立ち帰る勇気を我々にお与えください。主イエス・キリストのみ名により祈ります）